

令和7年度

「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」

職業実践専門課程の一層の社会的評価向上のための
共通の基盤整備の推進 「内部質保証人材育成講座」

評価概論(1)

1. 職業教育における評価

1. 職業教育における評価

【到達目標】

- ① 教育における「評価」の基本的な目的・種類を理解する
- ② 相対評価と絶対評価の違いを説明できる
- ③ 絶対評価の重要性と実施のための工夫を理解する

【目次】

- 1-1. 評価とは
- 1-2. 専門学校における評価の役割
- 1-3. 評価の種類と方法
- 1-4. 相対評価と絶対評価
- 1-5. 職業教育における評価の考え方

1. 職業教育における評価

1-1. 評価とは ①

◆ 文献・公的資料にみる「評価」の定義(例)

出典	定義内容
文部科学省(学習評価の在り方に関する資料等)	教育の中で、学習目標に照らして学習者の成果やプロセスを把握し、学びの質の向上に活用すること
OECD (Assessment Framework)	教師が学習者のパフォーマンスを測定・解釈し、指導や改善に役立てるための情報を収集するプロセス
大辞林	善悪・美醜・優劣などの価値を判じ定めること／品物の価格を決めること。また、その価格／ある事物や人物について、その意義・価値を認めること

1-1. 評価とは ②

- ◆ アセスメント(assessment)
 - ◆ 学習評価、成績評価 「評価データの収集・分析」
 - ◆ 学習者個人又はグループの、学習成果を測定するためのデータの収集 (ISO 29993:2017より)
- ◆ 評価(evaluation)
 - ◆ カリキュラム評価、授業評価 「価値判断」
 - ◆ 学習サービスに対しての考え得る調整を判断するための、アセスメントとモニタリングの結果を含む情報の体系的な収集(ISO 29993:2017より)

1-2. 専門学校における評価の役割

◆ 学生の成績評価

- 職業人材の育成で用いられる、知識・スキル・行動特性の評価
- 「できるようになる」ことを可視化するための評価

◆ 学校評価(学習サービスの評価)

- カリキュラムの評価、講師の評価、施設設備の評価等
- 自己点検評価／第三者評価

1-3. 評価の種類と方法

ブルームの理論では、「教育目標を明確にする」ことが評価の前提とされる。その上で、「いつ・何のために・どのように」評価するかを、診断的・形成的・総括的という3段階に分けて整理することで、「教育と評価の一体化」が実現できる。

種類	目的	使用場面の例
診断的評価	学習前の到達度や背景を把握する	プレテスト・アンケート
形成的評価	学習過程での理解・進捗を確認し指導に活かす	小テスト・ワークシート・口頭質問
総括的評価	単元や学期末などで、最終的な学習成果を判断する	期末試験・作品提出・実技試験

1-4. 相対評価と絶対評価 ①

成績の評価方法(例) ※ 問題だと感じる点はありませんか？

可否	合格				不合格	
評価	S	A	B	C	F	×
点数目安	100～90	89～80	79～70	69～60	59～0	評価なし
評価の基準	特に良い成績	良い成績	普通の成績	劣っている成績	不合格	評価なし
配分目安	上位10%	上位30%以内	中位	下位30%に入るもの	下位10%に入るもの	

注:「X=評価なし」は、出席不良、受験放棄等、当該科目の成績評価の前提条件をみたしていないと担当講師が判断したものの。

1-4. 相対評価と絶対評価 ②

◆ 相対評価の問題点(職業教育には不向き)

- 例:優秀な学生ばかりのクラスで、全員が80点以上を取っても順位付けで「C評価」が出てしまう
- 教育の目的が「競争」になってしまい、必要な能力の達成に目が向かなくなる

◆ 絶対評価の意義

- 「この水準に達すれば合格」という教育上の到達目標を明確に示せる
- 学習者は「何をどの程度できれば良いのか」がわかり、学習の動機づけになる
- 「職業人としての必要最低限の能力」を保証できる仕組みとなる

1-4. 相対評価と絶対評価 ③

相対評価と絶対評価の比較表(利点・課題)

項目	相対評価	絶対評価
定義	学習者同士の成績を比較し、順位や割合によって評価を決定する方法	あらかじめ設定した到達基準(目標)に対して、どれだけ達成しているかで評価する方法
評価の基準	他の学生の成績との比較(例:上位20%がAなど)	教員が設定した学習目標・到達目標に基づく
主な利点	・分布が一定になり、差がつけやすい ・成績の調整がしやすい	・個々の学習成果を正確に評価できる ・教育の透明性・説明責任を果たしやすい ・職業教育における能力保証に適する
主な課題	・学習者の努力や成果が正当に反映されない可能性あり・競争意識が強まる・全員が優秀でも一部が低評価になる	・評価基準の明確化と共有が必要 ・基準設定が甘いと「全員A」などのインフレーションが起こる可能性
教育との相性	一般教養科目や大学入試予備校など選抜を目的とする場面で使われがち	職業教育・専門教育・実務能力の保証が求められる場面に適する

1-5.職業教育における評価の考え方

視点	内容
アウトカム重視	学習の成果(知識だけでなくスキル(技能)や行動特性も含む)を重視。できるようになったかどうかを評価。
絶対評価の原則	到達すべき目標に照らして、個々の学生が「できたかどうか」で評価。集団内での順位ではなく、社会に通用するレベルかが判断基準。
三領域の総合評価	知識・スキル・行動特性を統合的に評価する。特にスキル・行動特性の可視化が重要。
多面的な評価方法	ペーパーテストだけでなく、実技試験・ルーブリック・ポートフォリオ・相互評価・面談なども活用。

令和7年度

「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」

職業実践専門課程の一層の社会的評価向上のための
共通的基盤整備の推進 「内部質保証人材育成講座」

評価概論(2)

2. 学生の成績評価(アセスメント)と授業評価(1)

2. 学生の成績評価(アセスメント)と授業評価

2-1. 成績評価の基本

2-2. 定量評価と定性評価

2-3. 成績評価方法

2-4. 評価方法の具体例

- ① ペーパーテストの改善(例)
- ② ルーブリック評価の活用
- ③ ポートフォリオ・パフォーマンス評価などの紹介
- ④ 成績評価にフィードバックを取り入れる

2-5. 成績評価のまとめ

2-6. 成績評価と授業評価の違い

2-7. 授業評価の主な方法

2-8. 学生アンケートの設計と活用

2-9. 授業改善にどうつなげるか

2-1. 成績評価の基本

◆ 成績評価の定義と役割

- 「評価＝単純に点をつけること」ではない
- 成績評価の3つの目的: 診断的評価・形成的評価・総括的評価

◆ 「良い評価」の3要件

- ① 妥当性(Validity): 学習目標に合った内容を測っていること
- ② 信頼性(Reliability): 評価が安定しており、再現性・一貫性があること
- ③ 公正性・透明性(Fairness / Transparency): 評価の観点や基準が明示され、学生にとって理解可能で納得できるもの

2-2. 定量評価と定性評価

◆ 定量評価とは

- 点数・順位・正誤など、数値に基づく評価(例:筆記試験、小テスト)
- 利点:比較しやすく、数値管理に向く
- 留意点:表面的理解しか測れない場合も

◆ 定性評価とは

- 記述・観察・パフォーマンス・プロセス重視(例:プレゼン、作品、ルーブリック)
- 利点:理解の深さや思考のプロセスが評価可能
- 留意点:評価者間のばらつき・基準の明確化が必要

2-3. 成績評価方法 ①

分類 カテゴリ	評価目的	評価 対象	主な評価方法	評価の 種類	特徴・留意点
知識の定着と理解	学習内容の理解度 確認・知識の定着	知識・理解	- 筆記試験(選択式・記述式)- 小テスト(対面・LMS)- 口頭試問	定量評価	・妥当性が高い設計が必要・応用・論述で深さも測れる・即時フィードバックが効果的
技能・操作の習得	実技能や職業技能の可視化	技能・操作	- 実技試験・技能テスト- ロールプレイ- チェックリスト評価	定性評価＋定量補助	・到達基準の明確化が重要・チェックリストで観察結果を定量化可能

2-3. 成績評価方法 ②

分類 カテゴリ	評価目的	評価 対象	主な評価方法	評価の 種類	特徴・留意点
思考・応用 力の発揮	思考・判断・構成 力の発揮	応用 力・論 理性	- レポート／論述課題- ケーススタディ 分析- プレゼンテーション	定性 評価	・評価観点の明示で妥当性・ 公正性を担保・ルーブリック と併用が効果的
表現・コ ミュニ ケーショ ン力	表現・伝 達能力の 育成	表現 力・構 成力・ 協働	- 発表・プレゼン- グ ループ討論- 相互評 価・自己評価	定性 評価	・形成的評価とも相性が良 い・観察＋ルーブリックで対 応可能

2-3. 成績評価方法 ③

分類 カテゴリ	評価目的	評価対象	主な評価方法	評価の 種類	特徴・留意点
職業的態度・姿勢の評価	態度・姿勢・協働性の観察と育成	社会性・態度・行動	- 実習観察記録- 出席・報告・提出状況- 教員のコメント記録	定性評価	・客観性確保のため複数観点・複数回の観察が望ましい
成長の記録と振り返り	学びの蓄積と可視化・内省	学習過程と成果物	- ポートフォリオ(紙／eポートフォリオ)- 学習ログ・振り返りシート	定性評価	・形成的評価に最適・学生のメタ認知を促進する
統合的・総合的な評価	知・技・態の総合判断	職業能力全体	- パフォーマンス課題- 成果発表会(卒業制作など)- ルーブリックによる複合評価	定性＋定量	・観点別に評価しやすく、育成指導にもつなげやすい

2-4. 評価方法の具体例

2-4-1. ペーパーテストの改善(例)

◆例: ビジネスマナー科目のテスト問題(知識確認)

【Q1】 敬語表現として正しいものを1つ選びなさい。

- A. 先生がいらっしゃいます
- B. 先生が来られます
- C. 先生がお越しされます
- D. 先生が来ます

→ 正答: A(尊敬語)

2-4. 評価方法の具体例

2-4-1. ペーパーテストの改善(例)

◆ 設計上の工夫

- 知識だけでなく理解・応用を問う問題も含める
- 単なる正誤でなく、「なぜその選択が正しいのか」を記述させる小問を加えることで深い理解が見える
 - 例:「その敬語が適切な理由を20字以内で記述せよ」

◆ 留意点

- 問題文の表現の明瞭性
- 正答の妥当性と選択肢の質(ひっかけ問題にならないよう注意)
- 解答後のフィードバック(形成的評価)が有効

2-4. 評価方法の具体例

2-4-2. ルーブリック評価の活用 ①

◆ 例：プレゼンテーション課題（観光ビジネス科）

観点	4:とても良い	3:良い	2:やや不十分	1:不十分
構成	論理的に整理され、導入・本論・結論が明確	基本的構成はできている	話の流れにやや不自然さあり	話の展開が不明確で、構成がわからない
表現	聞き取りやすく、姿勢・声のトーンも適切	概ね明瞭に話している	声が小さい／視線が定まらない	緊張が目立ち、話し方に問題がある
内容	自ら調べた情報を活かし、独自性がある	調査内容が整理されている	情報が断片的・引用に偏る	十分な調査がされていない

2-4. 評価方法の具体例

2-4-2. ルーブリック評価の活用 ②

◆ ルーブリック評価の特徴

- 評価基準を明示した表形式の評価法
- 観点別評価
- 成績だけでなくフィードバックとしても機能

◆ ルーブリック評価の利点

- ① 評価の透明性が高まる
- ② 学習目標との整合性が保てる
- ③ 主観のぶれを抑制できる
- ④ 学習者の自己評価・振り返りが可能
- ⑤ 教育改善にも活用可能

2-4. 評価方法の具体例

2-4-2. ルーブリック評価の活用 ③

◆ 活用のポイント

- 事前にルーブリックを学生に共有
→ 自己評価・相互評価にも活用
- 結果だけでなく、過程(プロセス)も評価対象に含める
- 教員間での評価観点のすり合わせが重要(信頼性確保)

2-4. 評価方法の具体例

2-4-3.ポートフォリオ・パフォーマンス評価などの紹介

- ◆ **ポートフォリオ評価**(例:ヘアスタイル制作記録、作品写真＋振り返り)
 - 「何ができたか」だけでなく、「どう考え、どう成長したか」を見える化
 - 成果物＋過程＋自己評価＋教員コメント などを一冊に

- ◆ **パフォーマンス評価**(例:接客ロールプレイ、調理手順の実演など)
 - 実際の行動・実技により評価
 - チェックリスト、観察記録、ビデオ分析等を活用

2-4. 評価方法の具体例

2-4-4. 成績評価にフィードバックを取り入れる

◆ フィードバックの目的

- 学生の学び直しを支援する(形成的評価との連動)
- 「できた点」と「改善点」を明示し、自己調整学習を促進
- 単なる「評価」から「育てる評価」へ

◆ 形式例

- コメントシート
- ルーブリック+総評コメント
- デジタルツール(LMS)での自動・個別フィードバック

2-5. 成績評価のまとめ

成績評価は「教える」と「育てる」をつなぐもの

- ◆ 「評価を設計する」とは、教えたいことと、評価したいことを一致させること
- ◆ 専門学校においては、「職業人としての資質・能力」が見える評価が求められる
- ◆ 定量評価＋定性評価の組み合わせが鍵

令和7年度

「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」

職業実践専門課程の一層の社会的評価向上のための
共通的基盤整備の推進 「内部質保証人材育成講座」

評価概論(3)

2. 学生の成績評価(アセスメント)と授業評価(2)

2. 学生の成績評価(アセスメント)と授業評価

2-1. 成績評価の基本

2-2. 定量評価と定性評価

2-3. 成績評価方法

2-4. 評価方法の具体例

- ① ペーパーテストの改善(例)
- ② ルーブリック評価の活用
- ③ ポートフォリオ・パフォーマンス評価などの紹介
- ④ 成績評価にフィードバックを取り入れる

2-5. 成績評価のまとめ

2-6. 成績評価と授業評価の違い

2-7. 授業評価の主な方法

2-8. 学生アンケートの設計と活用

2-9. 授業改善にどうつなげるか

2. 学生の成績評価(アセスメント)と授業評価(2)

2-6. 成績評価と授業評価の違い

◆ アセスメント(成績評価・学習者評価)

- 個々の学生の学習成果、スキル(技能)の習得状況、知識定着度などを測定する手段
- カリキュラムに定めた到達目標により、到達度を確認
- 指導・進級・卒業の可否判断にも活用

◆ エヴァリュエーション(授業評価・教育活動評価)

- 授業やカリキュラム、指導法、教材、教員の授業運営などの適切さを評価
- 教育の質保証や教育改善のPDCAサイクルの根幹を成す
- 個人ではなく、学科・コース等、学校組織として「教育プログラムの有効性」や「学科としての運営力」を問い直す評価

2-7. 授業評価の主な方法

- ① 学生アンケート(授業評価アンケート)
 - 量的評価(4段階など)で全体傾向を把握。
 - 質的評価(自由記述)で具体的な改善ポイントを抽出
 - 毎回授業後、学期中間、学期末などタイミングを工夫
- ② 教員の自己評価
 - 授業設計の意図と結果の整合性を見直す材料
 - 指導方針の一貫性や授業改善計画のベースにも
- ③ 相互授業観察(ピアレビュー)
- ④ LMS・学習ログ分析

<参考>「教員の自己評価項目(例)」

評価領域	評価項目	内容の説明
1. 教育内容・指導方法	授業計画と実施	シラバスに基づいた授業が行われているか、学習目標は明確か。内容は学生の職業能力向上に適しているか。
	教材・資料の充実	教材や指導資料の準備が適切か。ICTや実務的資料を活用しているか。
	指導方法の工夫	実習・演習、アクティブラーニング等、学生が主体的に学べる工夫がなされているか。
2. 学習評価の実施	成績評価の妥当性	到達目標に照らして適切な評価方法(例:ルーブリック、実技評価、筆記テスト等)が用いられているか。
	フィードバックの実施	学生に対して、評価結果を踏まえたフィードバックを適切に行っているか。
3. 学生対応・指導	学習支援	学習困難な学生への個別支援や声かけなど、教育的配慮が行われているか。
	生活・進路指導	学生の進路・キャリア形成支援を意識した関わりができているか。
4. 授業改善と自己研鑽	授業評価の活用	学生アンケート結果や授業後の振り返りをもとに、改善に取り組んでいるか。
	教育力向上への努力	FD(教員研修)への参加や、専門分野・教育法に関する継続的学習を行っているか。
5. 学科内・組織的連携	教育チームとの協働	他教員との連携、カリキュラム全体との整合性、学科会議などへの積極的参加が行われているか。

<参考>「授業(科目)単位の自己評価項目(例)」

項目分類	評価項目	内容例
1. 授業計画と準備	シラバスの適切性	授業目的、到達目標、評価方法などを明確に記述しているか。現場・業界ニーズと一致しているか。
	授業内容の構成	各回のテーマや進度、課題の難易度に無理がないか。系統性・一貫性があるか。
	教材・資料の準備	学生の学びを支える教材(スライド、プリント、動画等)が十分で、わかりやすい内容か。
2. 授業の実施	授業運営の工夫	時間配分、導入とまとめの明確さ、緩急や話し方、板書・ICT活用の工夫は適切か。
	学生の参加促進	発問、グループワーク、ペアワーク、実技練習など、学生が主体的に学べる場面をつくっているか。
	教室内の雰囲気づくり	学習意欲を引き出す雰囲気があるか。教員と学生の距離が適切か。
3. 学修成果の評価	成績評価方法の妥当性	到達目標に沿った評価基準・方法を用いているか(例:ルーブリック、技能実技、試験)。
	フィードバックの提供	成績や課題提出に対して、適切なコメント・助言を返しているか。
4. 学生理解と対応	学生の理解度把握	授業中のリアクション、課題提出、質問内容から学生の理解度を適切に掴んでいるか。
	学習困難者への対応	理解が遅れている学生への声かけ、補講・フォロー対応を行っているか。
5. 改善と自己研鑽	授業評価の活用	学生アンケートや振り返りから授業改善に努めたか。前年度との比較・見直しがなされたか。
	教育力向上への取組	自身の授業について、教育技法や業界情報のアップデート、授業デザイン研修などを活かしているか。

2-7. 授業評価の主な方法

- ① 学生アンケート(授業評価アンケート)
- ② 教員の自己評価
- ③ 相互授業観察(ピアレビュー)
 - 他教員の視点から授業運営を見直す機会
 - 教員の指導力向上と教員文化形成の効果も期待
- ④ LMS・学習ログ分析
 - デジタル教材の使用頻度、アクセス時間帯、クイズの正答率などを分析し、学習者行動の裏づけを得る
 - o”可視化されたデータ”として客観的な議論に貢献

2-8. 学生アンケートの設計と活用

学生アンケートは授業評価の要

⇒設計・実施・分析方法によって有用性が大きく変わる！

◆ 設問設計

- 授業内容、教員の説明、板書、配布資料、学生の主体的参加などの観点から項目を構成。

◆ 自由記述

- 肯定的意見だけでなく、具体的な改善要望を読み解く訓練が必要。

◆ 分析と活用

- 単に平均点を見るのではなく、設問ごとのばらつき、年度比較、教員別の特性を把握し、組織的に改善方針へと結びつける必要あり
- アンケート結果のフィードバックを学生に還元することは、学生のモチベーションや参画意識を高める意味でも重要

2-9. 授業改善にどうつなげるか

1. 課題の抽出

- 学生アンケートやピアレビューから、授業のどの部分に問題があるかを具体的に把握

2. 改善目標の設定

- 「次回はこの部分を〇〇のように工夫する」といった具体的で測定可能な目標を

3. 計画の実行と記録

- 改善策を授業シラバスや教材、評価基準に反映させ、実行内容とその効果を記録

4. FD活動への組み込み

- 個々の教員が得た評価と改善を、学科内FDで共有し、組織としての教育力を向上

まとめ（学生の成績評価と授業評価）

「授業評価」 ≠ 「教員が評価されるもの」
＝ 「教育の質を組織として保証し、
高めていくための道具」

「成績評価」 ≠ 順位づけ
(アセスメント) = 到達度を評価すること

成績評価と授業評価の相補性を認識し、両者を連動させること
が、学修成果の可視化・教育の説得力強化

令和7年度

「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」

職業実践専門課程の一層の社会的評価向上のための
共通的基盤整備の推進 「内部質保証人材育成講座」

評価概論(4)

3. 学生アンケート(満足度調査)の分析と評価

3. 学生アンケート(満足度調査)の分析と評価

- 3-1. アンケートの意義と目的
- 3-2. 設問設計の基本
- 3-3. 記述統計による分析手法
- 3-4. 自由記述の活用
- 3-5. 授業改善への展開

3. 学生アンケート(満足度調査)の分析と評価

3-1. アンケートの意義と目的

「学生アンケート」とは、

学生のニーズに答えられているか？ = 「満足度調査」

- ◆ ただの「満足度調査」で終わらせない！
 - 学生視点から授業を見直す機会
 - 教育改善のPDCAサイクルに活用
 - 満足度＝教育成果 ではないが、重要な指標となる

3-2. 設問設計の主な留意点

- ◆ 目的とゴールの明確化
- ◆ 簡潔で分かりやすい設問
- ◆ 設問数の絞り込み
- ◆ 公平な設問とバイアスの排除
- ◆ 回答形式の適切な選択
 - 選択肢は重複なく、明確に区分けできるように
 - 「どの程度か」を数値化する際には、4段階など偶数で
- ◆ 回答者の心理と順序への配慮

3-3. 記述統計による分析手法 ①

【統計量を用いた要約】

- ◆ **平均値**: Excel関数では、「=AVERAGE(範囲)」
 - すべてのデータを足し合わせてデータ数で割った値
- ◆ **中央値**: 「=MEDIAN(範囲)」
 - データを小さい順に並べたときに、ちょうど真ん中にくる値
- ◆ **最頻値**: 「=MODE.MULT(範囲)」 ※複数の最頻値を表示
 - データの中で最も頻繁に出現する値
- ◆ **標準偏差**: 「=STDEV.S(範囲)」 ※標本(データの部分集合)の標準偏差を表示
 - データのばらつき具合を示す指標
 - ✓例:「授業のわかりやすさ」平均3.2、SD=0.6(4段階)

3-3. 記述統計による分析手法 ②

【可視化による表現】

◆ 度数分布表

- データの分布を度数(回数)で表した表で、データのばらつきや傾向を把握できる

◆ クロス集計表

- 複数のカテゴリにデータを分類し、それぞれの組み合わせの頻度を示す表で、データの内側にある傾向や特徴を深く理解できる

◆ グラフ

- 棒グラフ、折れ線グラフ、円グラフなどで、データの分布やトレンドを視覚的に捉えやすくする

3-4. 自由記述の活用 ①

【自由記述の意義】

◆ 本音や深層心理の把握

- 選択式では得られない、学生が抱える具体的な課題、不満、要望、感情、またはそれらの背景にある心理を探ることができる

◆ 新たな発見と改善点の特定

- 教員や学校側が予想していなかった新しい気づきや、授業・サービスにおける改善点、新たなアイデアを発見する手がかりとなる

◆ 質の高い情報収集

- 数値データに隠れた学生の具体的な意見や具体的な経験談、理由などを収集でき、より深い理解を得られる

3-4. 自由記述の活用 ②

【自由記述の活用方法】

1. 設問設計の工夫

- 具体的な経験や感情を引き出すような質問を用意(具体例を求める質問が有効)

2. テキストデータの収集

- アンケート回答の最後に自由記述欄(学生が自由に意見を記述できる機会)

3. 集計・分析

- 集めた自由記述を読み込み、テーマごとに分類し、構造化(生成AIの活用が有効)

4. 改善策への反映:

- 分類されたテーマごとの意見を分析し、具体的な授業方法の改善、カリキュラムの改訂、相談窓口の拡充など、具体的な教育活動や学生サービスに反映

3-5. 授業改善への展開

1. アンケートの実施と分析

- 設問の設計／客観的な分析

2. 教員へのフィードバック

- 個別フィードバック／全体傾向の共有

3. 授業改善の実践

- 内容・方法の見直し／「教えて考えさせる授業」の導入

4. 効果の評価と継続的改善

- 再評価の実施／サイクル化(継続的に授業の質を高める)

「まとめ」と実践のすすめ

- ◆ 学生アンケートは「評価」ではなく「材料」
⇒ 教員自身が分析し、自己評価することで、「授業評価」となる
- ◆ できる範囲から始めることが重要
- ◆ 社会の変化、学生の変化に適応
⇒ 継続的な分析と改善が鍵